

ソ連侵攻、内戦、空爆、大旱魃に苦しむアフガンで、井戸を掘り、用水路を拓く

# 中村 哲口さん

(医師 61才)



## PROFILE

なかむらてつ ●1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒業。84年4月のパキスタン、ペシャワールの病院に赴任以来、24年にわたり、貧困層への医療活動、水源確保事業などの活動を行う。マグサイサイ賞、アジア太平洋賞、沖縄平和賞などを受賞。ペシャワール会現地代表。PMS基地病院（ペシャワール会医療サービス）総院長。

変わらぬ正義は、弱いものを助け、  
今、目の前で危機に瀕している命を  
どう救うか、という事なのです

やっとたどりついた診療所で、母親に抱かれた幼子が冷たくなっていく。大旱魃で井戸が涸れ、泥水を飲んで渴きを癒す子どもは、次々と赤痢などの感染症で死んでいった。医療だけでは救えない現実。きれいな水と食糧さえあれば……と井戸を掘り、用水路を拓く。今も空爆が続くアフガンで、武力で平和と命は守れないということも証明してみせたい。深い志が中村さんを突き動かす。「打つ手はある。」という人の目から、命がけて立ち向かう人の決意が感じられた。

取材・文／温水ゆかり 撮影／橋本哲 写真提供／ペシャワール会



ダラエ・ヌールのマルワリード用水路に集まる子どもたち。10人全員が水番さんの子どもである。(2007年4月)



## NHKも特集番組を作った 異色の日本人医師

福岡の「ペシャワール会」を訪ねた取材のこの日、中村哲さんは早朝にアフガニスタンから帰国したばかりだった。機内で一夜を過ごし、疲れはているはずなのに、凛としたまなざしの強さは、中村さんたちが用水路を拓いてアフガニスタンの大地を潤す様子を記録したNHKのドキュメンタリー番組にもあったとおり。アフガニスタンで井戸掘りをして

いる日本人医師がいて、若い世代が感動の声で話すのを聞いたのはもう何年前のことだろう。ベンチャー社長やヒルズ族など、電子の銭色の男たちばかりがもてはやされる中、日本人の中にもお金とは無縁の生き方で次世代の希望になる大人の男がいると、そのことにも感動した。しかしなぜ医師が井戸を掘ったり用水路を拓いたりしているのか。また、なぜそうせざるを得ないのか。さらに、それが「ペシャワール会」

# アフガニスタンの歴史と中村 哲さん

中村 哲さん

アフガニスタン

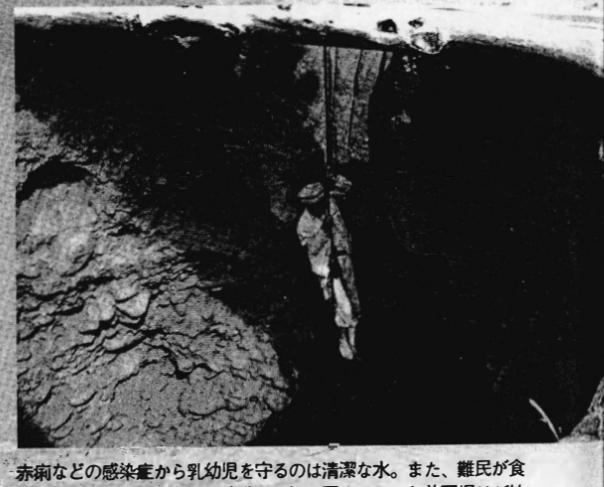
1946年 福岡県に生まれる。  
 1973年 九州大学医学部を卒業。  
 1978年 福岡登高会のティリチ・ミール登山に参加。アフガニスタンの現実に衝撃を受ける。  
 1979年 結婚した妻とパキスタンのペシャワールからカイバル峠を放する。  
 1983年 ペシャワール・ミッション病院赴任を決める。ペシャワール会発足。イギリス・リバプールの熱帯医学校にて研修のため、家族とイギリスへ。  
 1984年 らい根絶計画を目的にペシャワール・ミッション病院に赴任。  
 1986年 JAMS（日本アフガン医療サービス）を組織。  
 1987年 国境山岳地帯の難民キャンプで医療活動を行う。  
 1990年 子どもの教育問題で妻と子どもが帰国。  
 1991年 アフガン山岳部に三つの診療所を設立。無料診療にあたる。  
 1998年 パキスタンのペシャワールにPMS基地病院（ペシャワール会医療サービス 70床）を建設。らい診療とアフガン山岳部の無医地区診療の基地とする。  
 2000年 8月、水源確保事業（井戸掘りとカレーズ＝地下水路の再生）を開始。首都カブールに5カ所の臨時診療所を設立し、貧困地区の患者の無料診療を行う。  
 2001年 10月「アフガニのいのちの基金」を設立し、小麦と食料油の配給事業を開始。  
 2003年 イラク戦争開始の前日、3月19日に用水路建設開始。  
 2004年 2月、用水路1.6km完成。  
 2005年 4月、用水路4.8km完成。300町歩の砂漠化した田畑が灌漑された。  
 2007年 マルワリード用水路13.1km完成。  
 2008年 2月時点で17km完成。3000町歩が田園となる。最終的に全長21.5kmを目ざしている。

1919年 第3次対英アフガン戦争に勝利し英国から独立。  
 1973年 無血クーデターにより、国王を追放。共和制移行。  
 1978年 軍事クーデターで大統領一族が処刑され、人民民主党政権に。  
 1979年 ソ連軍10万人が侵攻し、親ソ連派のクーデターで共産党カルマル政権に。  
 1989年 ソ連軍撤退。国土は荒廃、食糧事情最悪に。約2000万人の人口のうち、死者200万人、600万人が難民となる。反ソ連ゲリラ（ムジャヒディーン）と政府軍で内乱勃発。  
 1991年 イラクがクウェートに侵攻したため湾岸戦争始まる。パキスタンは多国籍軍に参加し7500名を派兵。  
 1994年 内戦が全土に広がり、無政府状態の中でタリバーンが急成長。旧ムジャヒディーン勢力は反タリバーンを掲げ、北部同盟（マスード司令官）を作る。  
 1998年 タリバーンがほぼ全土を掌握。  
 2000年 史上最悪の大旱魃。  
 2001年 ヘルマン湾でのアメリカ駆逐艦テロで国連制裁。食糧制裁も含まれ、大旱魃のもとで難民が増加。タリバーンがバーミヤンの石仏を破壊し、世界の非難を浴びる。北部同盟マスード司令官暗殺。9月11日、アメリカ同時多発テロ。10月、アメリカはテロの報復でアフガン空爆。11月にカブール陥落、タリバーン政権崩壊。  
 2002年 カルザイが暫定大統領に。  
 2003年 3月20日 イラク戦争開始。  
 2004年 新憲法公布。初の大統領選挙でカルザイ政権が正式発足。タリバーン再結成し、攻勢が強まる。  
 2008年 今も空爆は続き、毎日たくさんの民間人が犠牲に。

する最大規模の部族社会を形成しているが、このパシュトゥン人が昔ながらに住んでいた地域を真つ二つに割る形になっているのが現在の国境線。19世紀末、ロシアと英国の対立が生んだ負の遺産である。その国境線は2400メートル級の山々が連なるスライマン山脈。パキスタンのペシャワールにいてハンセン病患者を診ることは、戦火を逃れて山越えしてくるアフガニスタンの人々と向き合うことでもあった。



募金により完成したPMS（ペシャワール会医療サービス）基地病院。ハンセン病の総合的治療が可能になったが、2007年、パキスタン政府から事実上の閉鎖勧告を受け、2年後にはアフガンのジャララバードに移転予定。



赤痢などの感染症から乳幼児を守るには清潔な水。また、難民が食べていけるようにするには砂漠を田畑に戻すこと、と井戸掘りが始まった。プティアライ村で灌漑用の井戸に降りる中村医師。



MAP/徳永智美

まさかこの直後（同12月）、パキスタンから青年団が観光に来ていたり、ラクダを運んだ遊牧民が監視員を尻目にゆうゆうと行き交っていたり、全体にまだのんびりした感じだったです」



アフガン国境、標高4000mの山岳部ポロ一ギル峠で野外診療。山岳地帯へは馬と徒歩だけが頼りで、医療器具は馬の背に載せていった。

に寄せられる寄付のみで行われているのはなぜなのか。グローバル、人道、ボランティア。中村さんの24年を綴ることは、身近になったそんなコトバの中身や重みをあらためて考えることでもある。

**蝶と山が導いた 泥臭い人情と郷愁の地**

中村哲さんとこの地のそもそもの縁は、ちょうど30年前、ティリチ・ミール（標高7708m）の峰に挑む福岡の登山隊に同行したことだった。「僕は蝶好きで、高山の珍しい蝶が見られるかもしれないという下心もあって参加したんですが、雄大な自然に魅入られた。それから街のたたずまいにも。馬車が行き交うパザールの喧噪、モスクから流れる祈りの声、インダス川の濁流、土臭い人情など、どれをとっても初めての土地なのに不思議な郷愁を感じる。それから憑かれたように何回か行き、新婚旅行ちゅうんですか（笑）、家内ともペシャワールを訪れ、そのときは国境の町まで行きました。あの当時警備はものしかかったけれど、ソ連から青年団が観光に来ていたり、ラクダを運んだ遊牧民が監視員を尻目にゆうゆうと行き交っていたり、全体にまだのんびりした感じだったです」



イギリス・リバプールの熱帯医学校に妻と二人の子ども連れて家族で赴任するときの壮行会。ペシャワール会もこのときに発足。作家の火野葦平の妹で『花と竜』のモデルになった玉井金五郎の娘でもある中村医師のお母さん（右から3番目）も出席。



アフガン国境標高2500～2600mの山岳地帯ラシュトで診察をする中村医師。イスラムでは、女性は肌を見せることは戒律で禁じられているので、夫（左）立ち会いのもと、厚い衣服の上から聴診器を当てる。

## 中村哲さんの24年

スタン側から見ればるかしたアフガニスタンに10万のソ連軍が侵攻するのは、ましてや4年後、海外協力団体の要請に応じてペシャワールの病院に「赴任するハメに陥る」などとは、夢にも想像していない。

医療協力の医師の仕事を引き受けたとき、看護婦さんをしていた中村夫人の一言が心強い。「ほかの所なら別だけど、あそこはまんざら知らない所ではないから」。夫唱婦隨の肝の据わり方でも言うべきか。夫妻は1983年熱帯医学校に留学するためにまずイギリスにもむき、翌年、すぐ隣は戦火の真つ只中というペシャワールに着任する。

**世界最大の部族社会を形成するアフガン人**

最初、現地でのミッション（使命）は「らい根絶」（発見者の名でハンセン病と呼ばれることも多いが、「らい」が医学用語）だった。それがアフガニスタン問題へ繋がっていった背景には、この地の民族と土地の折り重なった歴史がある。「アフガニスタンは国と言っても、われわれが持っている国民国家のイメージではない。実際は部族社会で、言語も違う各部族が割拠して暮らしているんです」

そんな部族の一つにパシュトゥン（アフガン）人がいる。彼らは現存

「ハンセン病患者は半分以上がアフガン人。ハンセン病の多発地帯は腸チフス、マラリア、デング熱、など感染症の多発地帯でもあって、まさか医師として、ハンセン病しか診ません」とは言えないでしょう」

中村さんは、ある自責の念も持っていた。登山隊のメンバーとして初めてこの地に来たときのこと。キャラバン隊はパキスタン政府の観光省より、村の人々の診療を拒否しないように言われていた。しかし、できることは少なかった。追いつけられながらも、見捨てざるを得ない場面もあった。そのことが、職業人としての中村さんを深く傷つけた。

中村さんは拠点病院を出て、医療活動を難民キャンプに広げ、さらにソ連軍撤退とともに国境を越えて、アフガニスタンの無医村にまで足を延ばすようになる。海外協力をする組織のメンバーとしての立場は離れ、独自の活動を始めていた。

無医村を訪ねて無料診療するというけれど、峻厳な山岳地帯、柔な足ではおぼつかない。山を愛する健脚が役立った。アフガニスタンのダラエ・ヌールに念願の診療所を開いたのは1991年のことである。

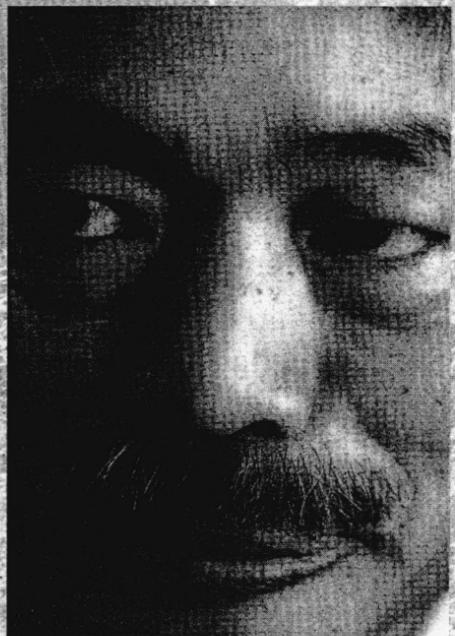
家族はこの前年に帰国し、離れて暮らす生活も始まっていた。「家内たちはベシワールに7年いたんですかね。最初は3、4年なら

かのように今度は世紀の大旱魃が国土を干上がらせる。2000年、世界保健機関(WHO)の出した数字が鬼気迫る。アフガニスタン国民の百万人が餓死線上にある。誇張ではないと、中村さんは直感した。「実際その年の冬は降雪がなく、緑の田畑は茶色に土漠化していた。次々に村が無人生化し、診療所近辺まできて落命するのは赤痢にかかった幼児がほとんど。健康なら簡単に死なないが、背景に栄養失調と脱水があるのが致命的でした」

中村さんは村人たちと水源確保に全力を注ぐ。これが「医者、井戸を掘る」のスタートである。だが、この大旱魃はまだ最悪のことではなかった。01年、9・11テロが起こる。

テロ直後に帰国した中村さんは、テロ特措法を論議する国会の特別委員会で参考人に立つという経験をしている。もちろん反対の立場だ。アフガニスタンの人々はヒロシマ、ナガサキを知っている。日本人に好意を持っている。むしろ自衛隊派遣は有害無益。そう証言すると、自民党議員からの猛烈な野次と怒号を浴びた。偽証でもないのに、取り消せ、とまで要求された。

中村さんはこの参考人質疑で、議員たちを前に、声を振り絞ってこう締めくくる。「一人の父親、母親としての皆さんに訴える。大旱魃と



## 2001年9月11日からの7年



アメリカによるアフガン空爆下、「アフガニのちの基金」で集まった募金で買った小麦と食料油を積んで、3台のトラックがカブールに向かった。(2002年1月)



アフガンのダラエ・ビーチクリニック(後のオキナワ・ピースクリニック)病院移転のために掘入れ式で現地の人に挨拶する中村医師。(2002年)

江戸時代の先人の知恵に学んだ蛇籠で護岸し、岸に植えた柳の根が蛇籠をしっかりと捕強し、激しい土石流でも水路決壊を食い止めた。



「農村の回復無くしてアフガンの再生なし」の信念のもとに開始した緑の大地計画。難民の帰還には、砂漠化した荒地を灌漑し、食糧自給率を上げることが最優先課題。用水路建設のために、自らショベルカーを動かす。後方はクナール河。(2003年)



用水路に水が通ると、女たちは水くみから解放され、子どもの病気も激減した。水辺には、子ども、カエル、トンボ、小魚が集まってくる。



持つて生まれた性格なのか、行きがかり上、引き下がれない。これで何万人食えると思うと「仕事」にも精が出る。

それも面白いという感じだったと思いますが、子どもが就学年齢になると教育問題も出てくる。それで家内と子どもたちだけで引き揚げました。夫が行きっぱなしになる生活がこんなに長くなるとは、家内も思っていなかったんじゃないですか(笑) 爆弾よりパンを! 8億円の「真心」が集まる

アフガニスタンは「つくづく運の悪い国」だと、中村さんは思う。ソ連軍が完全撤退する前後から、世界はアフガニスタンに注目、数十億ドル規模の援助が行われたが、今度内戦が激化、難民は帰る場所がない。そこにきて、91年の湾岸戦争。外国の援助団体はクモの子を散らすように姿を消してしまった。中村さんは狐につままれる。「あの数十億ドルの援助金はどこへ行ってしまったんだろう?」そして、戦火とバトンタッチする

飢餓対策こそが緊急課題である」と。愚かな議論に付き合っている暇はなかった。このさなかにも餓死する人がいる。「爆弾よりパンを」と、食糧調達の資金集めで、日本で「アフガニのちの基金」を立ち上げた。「目標、1億か2億円!」と中村さんが風呂敷を広げると、有志スタッフが「1億と2億では差があり過ぎます」と絶句した。しかし、ふたを開けると8億円が集まっていた。耳を傾けてくれた人々の中には、天皇后両陛下や、9・11で息子を失った補償金を寄付してくれた親御さんもいた。

中村さんは飛び帰り、パキスタン側で食糧を調達。空爆のさなか「決死隊」が峠を越えて首都カブールへ運ぶ。首都の中流以上の富裕層は外国に脱出、空爆に逃げまじい、空腹に耐えていたのはやはり田舎から流れ込んできた飢餓難民だった。

### 悲劇の国アフガニスタンの終わらない受難

中村さんが、あれが歴史の転換点だったと思っっていることがある。結果という報道にしか触れない私たちにとって、あまりに微妙なスイッチだが、タリバーン政権がアルカイダを匿っていると、9・11に先立つ同年の1月、国連がアフガニスタンに制裁を加えたことだ(ペルシャ

湾で米駆逐艦が自爆攻撃で大破した事件を受けて)。この制裁には食糧も含まれていた。

「当時タリバーンはアフガニスタンの9割以上を実効支配し、国際社会に認められようと涙ぐましい努力をしていた。だから交渉に持ち込む余地は十分あったのに、強権的なやり方を取った。それで政権内部の主流が追いつめられて、穏健派から過激派に移ってしまったんです。当時の外相もあれが転換点だった、と」

戦争→内乱→国連制裁→大旱魃による餓死の危機→報復の空爆。

これが20年以上にわたってアフガニスタンが置かれてきた生き地獄である。この地と深く結ばれた中村さんの義憤は、空爆で沸点に達した。「飢えて苦しむ瀕死の小国に、正義をふりかざした世界の超大国が東になってかかき、何を守ろうというのか。正義とは、弱きものを助け、命を尊重すること。命の尊厳こそ普遍的な正義ではないのか」

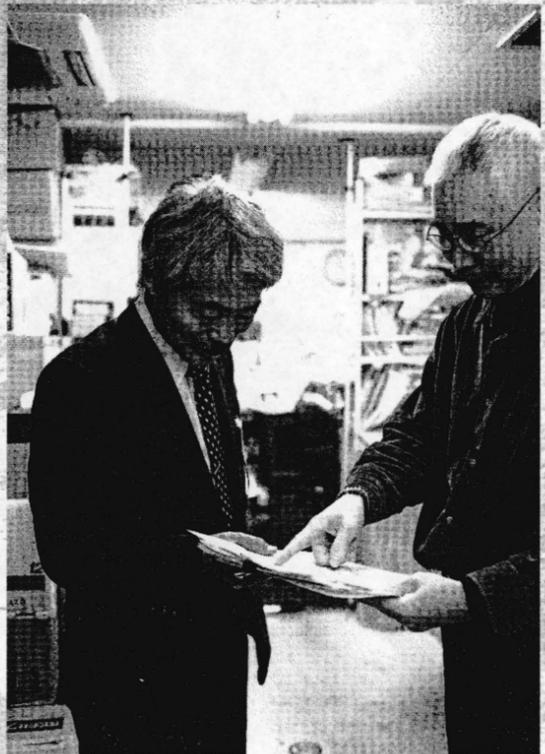
### 用水路建設で緑の故郷を取り戻せ

中村さんの哲学は、シンプルである。今日の前で危機に瀕している命をどう救うか。

「自分は一応まがりなりにも医者、医者は病気を治せばいい。しかし、ここでは清潔な飲料水と食べ物があ

「この人の本だけは自分で出したい」と思ったという石風社の福元満治さんと帰国後の打ち合わせをする中村医師。福元さんは、ペシャワール会の事務局長を務め、現地を20回以上訪ねている。

福岡市の石風社刊の中村医師の著書。「医は国境を越えて」(2000円)「ペシャワールにて」(1989年刊 1800円)「ダラエ・ヌールへの道」(2000円)最新刊で養老孟司さんも絶賛した「医者、用水路を拓く」(2007年10月刊 2000円)「医者、井戸を掘る」(2001年10月刊 1800円)「空爆と「復興」—アフガン最前線報告」【丸腰のボランティア—すべて現場から学んだ。書店にない場合は、直接、石風社へ。(☎092-714-4838)



れば罹らないですむ病気がほとんどなんです。となれば、抗生物質を一億円分買うよりも、一億円かけてきれいな水と食べ物が増えるようにしたほうがはるかにいいわけです」

正論である。しかし、だからといって普通、用水路建設という土木事業に着手しようとは思わない。素人が跳ぶには壁が高すぎる。ところがアフガニスタンの止まらない砂漠化を前にして、中村さんは跳ぶのである。

中村さんはスタッフを前にこうぶち上げた。用水路を建設して豊かな故郷を取り戻す。これはわれわれの武器なき戦である」と。03年のことだ。用水路は、現地の人たちと一緒に造り、彼らがその過程でさまざまなことを学びつつ、その後自分たちの手で補修や改修ができるよ

うな工法でなくてはなんにもならない。「現地の実情に合った援助を」と常々言ってきた中村哲学である。そのため、まさにモグラ叩きのように難関が続出した。

ヒントは意外なところにあった。筑後川の山田堰(福岡県朝倉市)など、治水事業が一大課題だった江戸時代の知恵である。

「たいしたもんです。日本の農業土木技術は、世界に冠たるものがある」この経験を通して、中村さんはこんなことを思った。「昔の技術には、これ以上はもう人間が手を出せないという一種の謙虚さがあった。人間の取り分はこれくらいにして、あとはお天道様にまかせておこうという考え。しかし明治維新以後、人間は「もっとも」と思うようになってきた。自然を人間の意図のままに操作できる対象として眺めるようになってきた、操作できるものだという錯覚が生まれたんですね」

そして、私たちは本当に幸せになったのだろうか？

ここに、用水路によって茶色の風景が緑の沃野に変貌したことを伝える写真がある。奇跡、それほど劇的。予定されている用水路の全長は21・5キロ。取材のこの時点で、17キロまで延びていた。完成目前。「新たに3千町歩、3千ヘクタールが灌漑される。1ヘクタールで大体

お米が4トン、裏作で主食の小麦も4トンできる。一人当たりの小麦消費量が約156キロくらいですから、何万人も食べますよ」

思わず顔がほころぶ。が、農業ができるようになって続々と帰還した村人に聞くと、砂漠化はもう20年

前からだと言つ。思わぬ証言だった。

ハンセン病と戦い、空爆と戦い、大旱魃と戦い、アフガン復興支援という巨大なまやかしと戦ってきたが、ここに来て地球温暖化というさらに巨きな敵が登場した。今年62才、中村さんの戦いはどこまで続くのか。

空爆のさなかに食糧を調達していたとき、日本で病と闘っている命があった。脳腫瘍と宣告された10才の息子である。翌年、中村さんら家族が見守る中、幼い命は旅だった。翌朝、庭で青葉を繁らせる息子と同じ樹齢の幼木を眺め、初めて涙

が溢れた。診療所近くまで来て冷たくなるアフガンの子どもたちの姿がだぶった。「バカたれが。親より先に逝く不孝者があるか。見とれ、おまえの弔いはわしが命がけてやる。あの世で待つとれ」(「医者、用水路を拓く」より)。

用水路に水が溢れた07年、歓声を上げて水浴びする子どもたちの中に、中村さんは確かに息子の姿を視た。同書にはこうも書かれている。「人は思いもせぬ事情に遭遇し、流されてゆく。摂理は推し量りがたい。時代は私たち個々の運命と交差しながら、模様を織り成して流れてゆく」

アフガニスタンの人々とともに生きる。そのこと自体が理不尽さの中で落命した人々の弔い合戦、素手で世界のインチキヤまやかに挑む中村さんの「聖戦」なのだ。

### ペシャワール会について

中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で1983年に発足。PMS基地病院建設や医療活動、水源確保事業、乾燥に強い品種の作付けを行う緑の大地計画などを募金によって行っている。

★事務局 〒810-0041福岡市中央区大名1-10-25 上村第2ビル603号 ☎092-731-2372 入会は年会費(一口¥3,000以上、維持会員一口¥10,000以上)を郵便振替で。(口座名義 ペシャワール会 郵便振替番号=01790-7-6559)

